

乳がん患者に対する薬剤情報提供書の満足度の経時的変化の検討

間瀬 広樹[†] 市川 和幸¹⁾ 小山 一子²⁾ 佐子 詠美¹⁾
山田 知美³⁾ 市野 貴信¹⁾ 伊藤 一弘⁴⁾ 犬飼 直也¹⁾

IRYO Vol. 69 No. 8 / 9 (396-399) 2015

要 旨

がん化学療法施行前に薬剤師が行う薬剤情報提供書を用いた服薬指導は、安心・安全な抗がん剤治療の中で副作用対策やスケジュール管理に欠かすことができない。服薬指導により患者は満足し、不安がなくなっているが、外来治療中の患者ニーズは変化しているにもかかわらず、薬剤情報提供書への満足度の経時的な変化についての調査は行われていない。そこで今回、乳がん患者26例を対象に満足度および不安度の経時的変化について検討した。満足度、不安度に有意な変動はみとめなかったが、満足度は高満足度を維持した。治療薬のみならず、対処方法や受診タイミングを明記した薬剤情報提供書は経時的にも有用であると考えられた。

キーワード がん化学療法, 満足度, 薬剤情報提供書

背 景

がん化学療法施行前に薬剤師が行う薬剤情報提供書（以下、説明書）を用いた服薬指導は、現在、チーム医療で行う安心・安全な抗がん剤治療の中で副作用対策やスケジュール管理に欠かすことができないものとなっている¹⁾。また、治療前に交付する説明書によりがん化学療法に対する理解が深まることで患者の多くは満足し、治療に対する不安がなくなっている²⁾⁻⁴⁾。しかし、治療開始後の外来化学療法

では、患者の多くが自宅での副作用の発現や生活などに不安を抱えている⁵⁾。がん患者の多くは家族や知人からの体験やインターネットからの情報により病気や治療のことについて調べている⁶⁾が、インターネット情報は不確かな情報もあることも指摘⁶⁾⁷⁾されている。一方で詳細な抗がん剤の服薬指導を望まない場合もある。外来治療中の患者ニーズは変化しているが、経時的な変化についての調査は行われていない。そこで今回、乳がん患者を対象に説明書に対する満足度および不安度の経時的変化について検

国立病院機構金沢医療センター 薬剤部, 1) 国立病院機構三重中央医療センター 薬剤部, 2) 国立病院機構静岡医療センター 薬剤部, 3) 三重大学大学院医学系研究科 トランスレーショナル医科学, 4) 国立長寿医療研究センター 薬剤部 †薬剤師

著者連絡先：間瀬広樹 国立病院機構金沢医療センター 薬剤部 〒920-8650 石川県金沢市下石引町1-1

e-mail: mase@kinbyou.hosp.go.jp

(平成27年2月27日受付, 平成27年6月12日受理)

Changes over Time in the Level of Satisfaction with Document-based Drug Administration Guidance for Breast Cancer Patients

Hiroki Mase[†], Kazuyuki Ichikawa¹⁾, Ichiko Koyama²⁾, Emi Sako¹⁾, Tomomi Yamada³⁾, Takanobu Ichino¹⁾, Kazuhiro Ito³⁾, and Naoya Inukai¹⁾, NHO Kanazawa Medical Center, 1) NHO Mie Chuo Medical Center, 2) NHO Shizuoka Medical Center, 3) Mie University Graduate School of Medicine, 4) National Center for Geriatrics and Gerontology

(Received Feb. 27, 2015, Accepted Jun. 12, 2015)

Key Words: chemotherapy, satisfaction, drug administration guidance

表1 対象者背景

		n=26
年齢	56.5 ± 6.35	(歳)
職業 無 / 有	14 / 12	(例)
手術 前 / 後	5 / 21	(例)
Stage I / IIa / IIb / IIIa / IIIb / IIIc / IV	3 / 5 / 11 / 5 / 2 / 0 / 0	(例)

表2 初回アンケート

項目	回答 (例)			
	はい	どちらでもない	いいえ	無回答
点滴スケジュールは理解できたか	26	0	0	0
点滴スケジュールは求めているものと一致していたか	24	1	0	1
副作用の内容は理解できたか	26	0	0	0
副作用の内容は求めているものと一致していたか	21	1	1	3

討したので報告する。

方 法

2007年5月から2013年3月までに国立病院機構三重中央医療センターにて術前もしくは術後に補助療法としてEC療法(Epirubicin+Cyclophosphamide)を4クール以上施行予定患者に対して、1クール目投与前に説明書を交付し服薬指導を実施した患者のうち、アンケート調査に文書同意を得られた女性患者を対象とし、アンケート調査を実施した。説明書は、治療薬名および点滴時間、副作用(悪心・嘔吐、口内炎、脱毛など)とその初期症状、副作用が出た場合の対処方法、受診タイミングを簡潔に記載したA4サイズ5枚の説明書とした。なお、14例目よりアプレピタント(制吐薬)の処方が可能となったため、アプレピタントの服用方法についてのみ説明書に追加記載を行った。各クールの間に薬剤師による服薬指導を必要に応じて実施した。1クール施行前(初回)、2-3クールの間(2回目)、4クール施行後(3回目)に説明書に対する満足度および不安度、内容の理解、求めているものとの一致などにつ

いてアンケート調査を実施した。満足度および不安度は、VAS(Visual Analog Scale)で評価できるように満足度のVASは0mmを不満、100mmを満足として記入し、不安度も同様に0mmを不安である、100mmを不安でないとして記入できるように設定した。

統計解析は、エクセル統計2012を使用した。各アンケート時点での平均および95%信頼区間を算出し、経時変化は、One-way Repeated Measure(ANOVA)により検討した。

調査開始にあたり、国立病院機構三重中央医療センター倫理委員会の承認(07-10)を得た。

結 果

対象患者26例の背景を表1に示す。初回指導時、点滴スケジュールおよび副作用の内容は全例で理解でき、1例を除き副作用の内容は患者が求めている内容と一致していた(表2)。2回目および3回目も同様に内容の理解とニーズは一致し、抗がん剤治療後に副作用が出た場合の対処方法は多くの患者で説明書を参考として対処していた(表3)。

表3 2・3回目アンケート

n = 26

項目	2回目 (例)	3回目 (例)
説明書の内容は求めているものと一致しているか はい / どちらでもない / いいえ / 無回答	21 / 2 / 1 / 2	21 / 4 / 0 / 1
副作用の内容は理解できたか はい / どちらでもない / いいえ / 無回答	26 / 0 / 0 / 0	26 / 0 / 0 / 0
副作用の内容は求めているものと一致していたか はい / どちらでもない / いいえ / 無回答	22 / 1 / 1 / 2	24 / 1 / 0 / 1
副作用が出た時、どう対処するか 説明書 / 病院の受診 / その他* / 無回答	11 / 3 / 6 / 6	13 / 4 / 5 / 4

* : その他 (同じような) 患者に聞く, 書籍

満足度の経時的変化の平均値 (95%信頼区間) は, 82.1 mm (73.8 - 90.4), 85.9 mm (79.4 - 92.5), 82.9 mm (73.7 - 92.0)であった. 不安度の平均値は, 67.6 mm (57.3 - 77.8), 69.2 mm (58.2 - 80.0), 74.0 mm (64.0 - 84.1)であった. 満足度, 不安度に有意な変動は認めなかった.

考 察

初回時の説明により患者の多くは満足しており, これまでの報告と同様³⁾に説明書の有用性が確認できた. 外来化学療法における薬剤師外来の有用性はすでに報告されている⁸⁾⁹⁾が, 説明書の経時的な満足度の調査は行われていない. 経時的な満足度および不安度に有意な変動を認めなかったが, 説明書を用いた服薬指導によりがん化学療法に対する理解が深まること, 2・3回目のアンケート結果における各項目の理解は高いレベルで維持できていること, 副作用についても約半数の患者が説明書により対処していると回答していることなどから, 患者の居宅での不安や副作用のセルフメディケーションを支援することができたことが, 患者の高満足度を維持したと考えられる. 不安度については, 平均値は下がっているが今回の症例数では有意差を認めることはできなかった.

今回, アンケート調査開始時に外来化学療法室に服薬指導を主な業務とした薬剤師が常駐していなかったため, 満足度が減少することを想定し調査を開始したが, 調査開始とほぼ同時に服薬指導を主な業務とした薬剤師を配置することができたこと, 説明

書を用いない服薬指導は医療現場では実施することができないため, 説明書のみの有用性についての検証ができなかった可能性は否定できない. しかし, 患者の満足度および不安度の経時的変化を確認できた意義は大きいと考えられる.

以上の結果から, 治療薬のみならず, 対処方法や受診タイミングを明記する説明書を用いた服薬指導は経時的にも有用であると考えられた.

著者の利益相反: 本論文発表内容に関連して申告なし.

[文献]

- 1) 高柳和伸, 高橋一栄, 尾上雅英ほか. 全診療科を対象とした「がん化学療法説明書」の作成とその運用. 日病薬師会誌 2006; 42: 49-52.
- 2) 渡邊裕之, 相良英憲, 伊藤善規ほか. 外来化学療法室における患者アンケート調査に基づく患者満足度の評価. 日病薬師会誌 2007; 43: 201-4.
- 3) 長谷部忍, 箕曲真由美, 田村宏美ほか. 薬剤師によるがん化学療法投与前指導が患者に及ぼす影響. 日病薬師会誌 2007; 43: 227-31.
- 4) 中田栄子, 折井孝男, 榊原賢一朗ほか. 癌化学療法に関わる薬剤師の役割-質の高い情報提供の試み-. 医療薬 2005; 31: 883-91.
- 5) 早川昌子: がん患者の心の変遷や思いの先を知る. 薬事 2014; 56: 892-5.
- 6) 後藤悌: インターネットにおけるがん医療情報の現状と, 改善へのとりくみ. 情報管理 2010; 53:

- 12-8.
- 7) Goto Y, Sekine I, Sekiguchi H et al. Differences in the Quality of Information on the Internet about Lung Cancer between the United States and Japan. *J Thorac Oncology* 2009 ; 4 : 829-33.
- 8) 野添大樹, 安永亘, 園田俊郎ほか. 外来がん化学療法における薬剤師外来の有用性の検討, *日病薬師会誌* 2011 ; 47 : 1305-8.
- 9) 四十物由香, 根本昌彦, 佐藤涉ほか. 経口分子標的薬治療における薬剤師外来有用性の検討, *癌と化療* 2013 ; 40 : 901-5.